

3世代が繋ぐ、背広の浪漫
ツキムラ物語

奈良の町で、親から子へと繋いでいった「洋服店」。そのタスキを受け取った現社長 岸伸彦氏の記憶と共にツキムラの軌跡、そしてこれからご紹介していくコーナーです。



岸社長

PRODUCED BY TUKIMURA

ツキムラの歩み

時代背景

1991年頃	「着こなし講座」の講師を務める	湾岸戦争が勃発、ソ連崩壊
1992年頃	ツキムラのオリジナル服地「ラガソット」をイタリア、ピエラ市の工場で生産開始	毛利衛がスペースシャトル・エンデバーに搭乗し宇宙へ
1995年	初の住宅地域の店舗、学園前店オープン	阪神大震災、地下鉄サリン事件
1996年	有限会社 ツキムラ(岸プランニングオフィス)を設立	プリクラが大流行、液晶の携帯電話が普及
1998年	通商産業省による新業態開発事業の調査員を務める	長野オリンピック開催
1999年	東京ビックサイトで店舗総合見本市「ジャパンショップ99」で初出展	欧州統一通貨「ユーロ」が導入



上の写真は、イタリアのピエラ市の工場で商談をする岸氏。下の写真は、学生に向けてリクルートスーツ講座を教えている模様。



前回までのあらすじ
大正14(1925)年、奈良町の一角で創業されたツキムラ洋服店。その3代目として生まれた岸氏。20代で店を担うようになった矢先、イタリアで、本物を目の当たりにしてくじけた。その悔しい思いをバネに、株式会社ラガソットの設立を果す。

学園前店で気づいた「縫う」ことの根底にあるもの

1990年代初旬、バブル期。近鉄奈良駅付近には証券会社が目立ち並び、その一角にあるツキムラ近鉄奈良駅前店は時代の申し子のようなサラリーマンたちで賑わっていた。当然、売り上げは順調に推移。この時期、岸氏は仕入れと縫製に夢中になっていた。頻繁にヨーロッパや香港の商社に仕入れに出かけ、近鉄奈良駅前店で高級スーツのセールの仕掛けた。仕入れが良いと、勝手に売れていく。「海外のスーツや縫製など見るもの触れるものが新しく、それを手に入れることがチャレンジのように思えた。良いものを売る度に、自分の力をカタチにしているようだった」と岸氏という。ワーキングホ

リデーで奈良に来ていたオーストラリア人の女の子を雇い、「店の中では英語しか使わない」と決めると面白がって訪れるお客も増え、店は賑わった。



1945年頃先代社長

その頃、自動車会社から「スーツの着こなし講演会」の講師を頼まれ、ビジネス専門学校で「リクルートの着こなし講座」の仕事も舞い込むようになった。お洒落とは何か。講演で話しながら、迷いが頭をもたげ始めた。背広を着るときには、目的がある。雑誌に載っている格好いいスーツを着ているも、中身が伴わなければ空虚な抜け殻に映ることがある。スーツは中身を支えるもので、決して主役にはなれない。基本に立ち返って考えてみた。「縫う」ことの根底にあるもの。頭に浮かんだのは、母親が穴の空いた靴下や、ほつれたボタンを縫いつけてくれる姿だった。「どんくさいスーツでもいい

体型に合ったその人のためのものを」。母親が繕ってくれた服のように、オーダースーツも世界にひとつ「一期一会のもの」とあると気づいたのだった。

ツキムラが進む方向性が固まり、時代を見つめてみた。土日曜と休みの日に展示会をする、家族連れのお客がグッと増えてきたのだ。ちょうど家族の中で父親の威厳が下がり始めてきたと言われる頃。スーツ選びの発言権が奥さんへ移ってきたことが伺えた。近鉄奈良駅前店に次いで、学園前店の出店を計画。大型の団地があり、住宅地も増えている。住んでいる人たちの生活が見えてこそ、店のコンセプトが定まるものだ。バスで通勤する人もいれば、自転車ですべて出る人も少なくないだろう。とすると、ウールの質感だけにこだわるのではなく、打ち込みの強い糸が入っている方が自転車通勤には向く。郊外住宅地の家族向け第1号店として、学園前店にはターミナルの駅前店舗とは異なる発想が必要だ。

学園前の店がある通りは、今でこそ、富雄と学園前を結ぶにぎやかなエリアだが、当時はまだ道が繋がっておらず、まるで袋小路にある隠れ家。傍目には店舗も増え、順風満帆に見えるかも知れないが、夜になると付近にチラシを配り歩く日々だった。もちろん成功している実感などなかった。家庭を顧みず走り続け、2人の子どもの運動会にも1回ずつしか見に行けていない。

それでも店を軌道に乗せることに夢中になり、販路を拡げていった。だがその一方で、日本の縫製工場がひとつ、またひとつと姿を消していた。憂うべき実情に気付く余裕などなかった。

(次号へ続く...)